

英語プレースメントテストと適応調査に関する分析 Analysis of English Placement Tests and Freshman Survey

井上加寿子*
Kazuko Inoue

抄 録

本稿は、関西国際大学で英語プレースメントテストとして実施されているG-TELPと、2009年に1年次生を対象に実施された適応調査について報告するものである。英語プレースメントテストの得点と顕著な関連がみられたのは適応調査の「留学」および「外国旅行」に対する意識を問う項目で、いずれにおいても「実現したくない」と回答したグループより「実現したい」と回答したグループの方が英語プレースメントテストが高得点であることがわかった。春受験時と夏受験時の得点の変化については、特に「留学」の項目について、「実現したくない」と回答したグループより「実現したい」と回答したグループの方が得点の伸びが大きいということがわかった。このことから、学生の入学時の留学に対する実現意識の高さと入学後の英語力の上達に関連があることが明らかとなった。

1. 高等教育における英語教育

1.1 英語教育の重点化

今日、グローバル化が急速に進展し、国際社会で今後活躍していくことが望まれる人材の育成の一環として、世界における共通語としての英語が以前にもまして重視されてきている。2003年3月には、『英語が使える日本人』の育成のための行動計画¹が文科省により策定された。これは、高等教育における人材育成の多様性をふまえて、「大学を卒業したら仕事で英語が使える」人材を育成するという観点から、教科内容の改善や大学間の協力体制の構築、大学教員養成のあり方等について改善を促すものであった。そして、同年から「特色ある大学教育支援プログラム」が実施されたことにより、英語教育の改善を含む大学教育の改善に資する種々の特色ある優れた取り組みが選定され、大学教育の改善に貢献してきた。また、世界的に人材獲得競争が激しくなっているという現状をふまえ、2009年には、日本の高等教育の国際競争力を強化し、国際的に活躍できる人材の養成を図るため、「国際化拠点整備事業（グローバル30）」が文科省により策定され、全国で13大学が採択された。

こうした背景から、日本の高等教育において英語教育科目に力を注ぐ大学は少なくない。例えば、関西国際大学では、教育学部英語教育学科において英語科目はすべて英語で実施されている。同様に一部の学部・学科において英語で授業が実施されている大学としては、上智大学（国際教養学部）、早稲田大学（国際教養学部）などが挙げられる。また、国際教養大学（Akita International University, AIU）のように、英語教育科目に限らず、大学で提供されるすべての授業を英語で実施するオールイングリッシュによる授業を行っている大学もある。さらに、英語教育のための特別なプログラム等を実施している大学もある。お茶の水女子大学では、「コア外国語教育プログラム」として、初年度から効果的な英語学習ができるように体系的にプログラムが組み立てられている他、英語圏からの留学生と数日間生活をともにする「イングリッシュ・キャンプ」と呼ばれる国内合宿や、海外の提携大学で語学研修に参加する「海外語学研修」による単位認定制度などが実施されている。また、デジタルハリウッド大学ではビジネスで使える生きた英語力の習得に力を注いでおり、TOEICで高スコアを達成することを目標とする「TOEIC®」、TOEFLで高スコアを達成す

* 関西国際大学高等教育研究開発センター 教育総合研究所学内研究員

ることを目標とする「留学英語」などの英語関連科目が幅広く展開されている。その他、1, 2年次に集中的に英語を学ぶ「英語教育プログラム」(English Language Program, ELP)を実施している国際基督教大学(International Christian University)や、遊びながら英語を楽しく学ぶ“英語の遊び場”をコンセプトとする「英語村 E3」²を開設した近畿大学など、それぞれの大学独自の英語教育の実施例も見られる。

1.2 英語教育と検定試験

先に述べた『「英語が使える日本人」の育成のための行動計画』の2003年の策定以降、大学入学選抜試験において英検や TOEIC, TOEFL, ケンブリッジ大学英語検定試験などの外部検定試験結果を活用することが促進されてきており、英語教育科目についてもこれらの検定試験を採用する大学が増えてきている。中でも多くの教育機関が利用しているのが、米国非営利教育団体である Educational Testing Service (ETS) 開発の TOEIC と TOEFL である。TOEIC とは、Test of English for International Communication の略称で、英語によるコミュニケーション能力を幅広く評価する世界共通の英語テストとして知られる。国際教育交換協議会(CIEE)日本代表部 TOEFL 事業部編集『TOEFL® テストスコア利用実態調査報告書』(2008)によると、2008年度には、日本国内で821校(大学449校、短大54校、高専58校、中等教育学校3校、高校235校、中学校22校)の教育機関が TOEIC を採用した。近畿では、関西外国語大学、京都外国語大学などの外国語大学をはじめ、関西大学、立命館大学、同志社大学などの私立大、京都大学、大阪大学、神戸大学などの国立大が TOEIC を採用している。また、山口大学では、2003年より TOEIC のスコアを卒業要件とし TOEIC に準拠した英語教育が全面的に導入され、2004年には、同大学の「TOEIC を活用した英語カリキュラム」が2004年度文部科学省「特色ある大学教育支援プログラム(特色 GP)」に採択となった。その他、東京農工大学大学教育センター教育プログラム部門(2010)による「東京農工大学 TOEIC 試行結果報告書」³に TOEIC 準拠の授業実践の詳細な報告がなされている。

そして、TOEIC と並び英語能力の客観的測定として世界的に広く用いられる検定試験が TOEFL である。TOEFL とは、Test of English as a Foreign Language の略称で、1964年に英語を母国語としない人々の英語コミュニケーション能力を測るテストとして ETS により開発された、大学のキャンパスや教室といった実生活でのコミュニケーションに必要な、「読む」、「聞く」、「話す」、「書く」の4つの技能を総合的に測定する試験である。国際教育交換協議会(CIEE)日本代表部 TOEFL 事業部編集『TOEFL® テストスコア利用実態調査報告書』(2008)によると、日本国内の2008年時の TOEFL 利用状況について、回答団体293校中141校が単位認定に TOEFL スコアを利用していると回答しているとされる。うち、全学部・学科で利用していると回答した大学は34校で、全体の約4分の1を占める。利用理由は、「英語運用能力を客観的に測定できる試験だから」(87%)との回答が圧倒的多数を占め、「学生に対して客観的な評価基準を示せるから」(59%)、「信憑性の高い試験だから」(43%)等の肯定的理由がそれに次ぐ⁴。

国立大学の例では、山口大学が TOEIC を卒業要件とする他、TOEFL を全学の共通教育科目として単位認定を行っている他、大阪大学(外国語学部)、神戸大学(医学研究科)、和歌山大学(教育学部、経済学部、観光学部、システム工学部)などでは一部の学部・学科のみで単位が認定されている。私立大学についても同様に、大阪経済大学や甲南大学、神戸女学院大学、同志社女子大学のように全学部で TOEFL のスコアを単位認定に利用している大学も見られる一方で、関西外国語大学(国際言語学部国際コミュニケーション学科)、神戸親和女子大学(文学部、発達心理学部)、武庫川女子大学(文学部英語文化学科、短期大学部英語コミュニケーション学科)のように一部の学部・学科において利用されている大学もある。このように、TOEIC/TOEFL を卒業要件や単位認定として利用している大学が多く見られることが近年の傾向といえる。

2. 関西国際大学における英語能力測定試験の実施状況

2.1 TOEFL-ITP

次に、関西国際大学で利用している英語能力測定試験についてとりあげる。前述のように、TOEFL のスコアを単位認定に利用している大学その他、習熟度別クラス編成のためのプレースメントテストとして利用している大学も一部ある。例えば、国際教養大学 (AIU) では、EAP (English for Academic Purposes, 英語集中プログラム) により在学中はすべての授業が英語で行われるが、新入生は入学直後に TOEFL を用いて 3 つのレベルにクラス分けされ、EAP 終了時には TOEFL スコア 500 点を取得することを目標とする。また、名古屋大学では、2009 年度より英語教育に関する新カリキュラムが実施されており、2009 年 4 月には習熟度別にコースを分けるために全入学生 2,218 名を対象に TOEFL-ITP および Criterion⁵ を利用して与えられたテーマの英作文を書く試験が実施された。関西国際大学では、教育学部英語教育学科が TOEFL-ITP をプレースメントテストとして利用しており、英語教育学科の学生は全員 1 年次に 3 回 (4 月, 7 月, 1 月) TOEFL-ITP を受験する。

2.2 CASEC

関西国際大学ではまた、STEP (Society for Testing English Proficiency, Inc., 日本英語検定協会) が基礎開発し、JIEM (The Japan Institute for Educational Measurement, Inc., 教育測定研究所) が開発・運営している英語コミュニケーション能力判定テストである CASEC (Computerized Assessment System for English Communication) を 2006 年より導入している。CASEC は従来のペーパーベースの試験と異なり PC 上で受験するため、いつでもどこでも受験でき、試験終了後その場ですぐスコアが表示されるという利点がある。例えば、松山東雲女子大学のように、1 学年全員が学期の初めと終わりに CASEC を受験し 3 つの習熟度別クラスに分けるといったプレースメントテストとしての活用例も見られる。関西国際大学では、CASEC をプレースメントテストとしては利用しておらず、正課授業外の学生の自主的な利用にとどまっている。

2.3 G-TELP

関西国際大学が 2010 年度現在英語科目履修に関する新入生向けプレースメントテストとして採用している検定試験は、教育学部 (英語教育学科) が採用している TOEFL-ITP と、人間科学部 (ビジネス行動学科, 人間心理学科) および教育学部 (教育福祉学科) で採用している G-TELP (General Tests of English Language Proficiency, 国際英検ジーテルプ) の 2 種類である。G-TELP は、GRM (Grammar), LST (Listening), RDG (Reading) の各セクションが 100 点ずつの計 300 点満点の試験であり、1 年次開講科目である「基礎英語」および「総合英語 I」の履修に関し、教員がプレースメントテストのスコアを基準に習熟度別にクラスを編成する。G-TELP のスコアは、2010 年度春学期までは上位者の選抜の利用にとどまっていたが、2010 年度秋学期以降、学生の取得スコアに基づいたクラス分けに利用されている。「基礎英語」、「総合英語 I」の 2 科目は基本教育科目 (必修) であるため、関西国際大学では 1 年次生 (教育学部英語教育学科を除く) が入学以降、4 月 (春学期開始前) と 7 月 (春学期終了後) に計 2 度 G-TELP を受験する。次に、関西国際大学人間科学部の 2009 年度 G-TELP について詳細にとりあげる。

表 1. 課題内容 (2009.7 実施分)

セクション	課題番号	課題内容	
GRM	1	YES/NO QUESTIONS	YES/NO 疑問文。質問に YES か NO で答える。
	2	PERSONAL PRONOUNS	文章に対し、適切な人称代名詞 (例: I, my, me, mine, myself) を答える。
	3	SIMPLE PAST	文章に対し、適切な過去形を答える。
	4	SIMPLE PRESENT	文章に対し、適切な現在形を答える。
LST	1	PICTORIALS	イラストや電車の時刻表やランチメニューを見て、それに関する質問に答える。
	2	SINGLE STATEM/QUES	簡単な内容の話しかけ、質問に答える。
	3	TRANSACTIONS	ペットショップでの店員と客の会話を聞き、その内容に関する質問に答える。
	4	INSTRUCTIONS	ある植物の育て方に関する説明を聞き、その内容に関する質問に答える。
RDG	1	APPLICATIONS	読書クラブへの入会申込用紙を読み、記入されている情報に関する質問に答える。
	2	ANNOUNCEMENTS	月極の貸駐車場の案内を読み、その内容に関する質問に答える。
	3	FACTUAL ACCOUNTS	実在した人物の活動を紹介する文章を読み、その内容に関する質問に答える。
	4	PERSONAL CORRESPOND	ある人が友人に出した手紙の内容を読み、それに関する質問に答える。

*G-TELP 日本事務局提供資料 (2010 年 9 月)

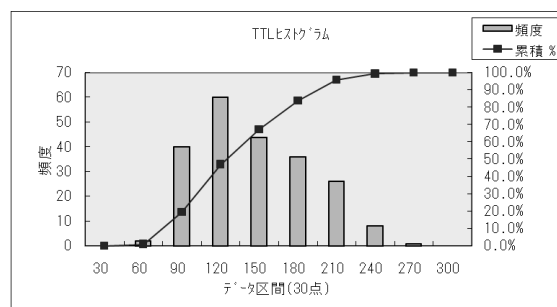
表 2. 基礎統計 (関西国際大学 人間科学部, 2009.7)

統計項目	GRM	LST	RDG	TTL (G+L+R)
標本数	217	217	217	217
平均	48.2	41.7	42.5	132.4
標準偏差 (n)	20.343	13.873	17.781	43.390
標準偏差 (n-1)	20.390	13.905	17.822	43.491
分散 (n)	413.852	192.447	316.158	1882.725
分散 (n-1)	415.768	193.338	317.621	1891.442
最小値	5	0	0	55
中央値	45	40	40	125
最大値	100	75	90	245
範囲	95	75	90	190
第 1 四分位数	35	35	30	95
第 3 四分位数	60	50	55	165
歪度	0.444	0.201	0.374	0.459
尖度	-0.403	-0.111	-0.457	-0.629
変動係数	0.422	0.333	0.418	0.328

*G-TELP On demand Testing Quick Report (2009)

表 3. 度数分布 (2009.7)

TTL (G+L+R)		
データ区間(30点)	頻度	累積 %
30	0	0.0%
60	2	0.9%
90	40	19.4%
120	60	47.0%
150	44	67.3%
180	36	83.9%
210	26	95.9%
240	8	99.5%
270	1	100.0%
300	0	100.0%



*G-TELP On demand Testing Quick Report (2009)

3. 英語プレースメントテスト

3.1 受験データ

関西国際大学(人間科学部)では、2009年度には、2009年4月1日に230名、2009年7月22日に217名の学生がプレースメントテストとしてG-TELPを受験した。7月時のテストを例にとると、課題内容は表1に示すように、Yes/No 疑問文や時制に関するもの、日常会話や手紙等の内容に関するものを中心とした基礎的な内容となっている。また、表2に示すG-TELPの基礎統計値にみるように、GRM, LST, RDGの各セクションの平均点は40点台、3セクションの合計(TTL)の平均点は132.2点で、全体として4割強の得点率となっている。30点ごとの度数分布や標準偏差をみても全体としてばらつきは大きくない(表3)。

3.2 2時点の得点変化

ここで、比較のため、同志社大学他の1年生時の調査についてふれておく。平成21年度「大学教育充実のための戦略的大学連携支援プログラム」に採択となった、同志社大学、北海道大学、大阪府立大学、甲南大学の国公立4大学連携による「相互評価に基づく学士課程教育質保証システムの創出一国公立4大学IRネットワーク」では、事業の一部として4大学で連携して1年生調査が実施されている。4大学による「1年生調査2009」では、CEFR(Common European Framework of Reference for Language: Learning, teaching, assessment, 外国語の学習, 教授, 評価のためのヨーロッパ共通参照枠)を用いて学生の英語運用能力の習得状況の確認が行われた。この調査では、1年生の入学時(4月)と、入学から半年以上経過した調査時(11月から12月まで)の2時点のCEFRが比較された。これによると、「入学後に英語運用能力が高まった者は全体の30%にも満たなかった」こと、「入学時の英語運用能力を維持する者が最も多い」こと、「レベルダウンする者も少なからずいる」こと、「概して入学時に初級レベルだった者ほどレベルが高まる一方で、高いレベルに到達していた者ほど入学後の能力低下が目立った」ことなどが主だった傾向として報告されている⁶。

関西国際大学のG-TELPについて、2009年度入学生の4月受験時と7月受験時の得点を比較してみると、4月の平均点は122.5点、7月の平均点は132.2点となっており、9.7点の上昇がみられた。GRM, RDG, LSTの各セクションにおいてもそれぞれ4月と7月で得点の上昇がみられ、そのすべてにおいて有意差がみられた(表4)。このことから、関西国際大学に入学後、1年時春学期の授業を受講前と受講後で、学生の英語力が全体的に向上していることがうかがえる。さらに、2009年4月受験者230名と2009年7月受験者217名のうち重複している受験者215名について2時点の得点の変化をみると、4月時よ

表 4. t-検定結果

2009年4月-7月

	TTL(G+L+R)	TTL(G+L+R)	セクション	2009.4	2009.7	差	有意差
平均	122.5235849	132.240566	TTL	122.5	132.2	9.7	あり
分散	1307.93783	1899.102991	GRM	44.9	48.0	3.1	あり
観測数	212	212	LST	37.9	41.7	3.8	あり
ピアソン相関	0.781853257		RDG	39.7	42.6	2.9	あり
仮説平均との差異	0						
自由度	211						
t	-5.19193865						
P(T<=t) 片側	2.44238E-07						
t 境界値 片側	1.652107287						
P(T<=t) 両側	4.88476E-07						
t 境界値 両側	1.971270598						

検定結果 P(T<=t)<0.05 ⇒ 有意差がある

*G-TELP 日本事務局提供資料 (2010年9月)

表 5. 得点変化 (2009.4—2009.7)

変化	人数	割合
得点アップ	105名	48.8%
変化なし	52名	24.2%
得点ダウン	58名	27.0%
合計	215名	

表 6. 上位グループと下位グループ

		2009.4	2009.7	差
上位グループ	平均	152.1	173.3	21.2
	標準偏差	23.8	27.9	
下位グループ	平均	93.4	99.9	6.5
	標準偏差	17.5	19.3	

り7月時に得点がアップしたのが105名(48.8%)、得点がダウンしたのが58名(27.0%)、2時点の得点差が±5点以内で大きな変化が見られなかったのが52名(24.2%)という結果であった(表5)。この点は、同志社大学他の「入学後に英語運用能力が高まった者は全体の30%にも満たなかった」、「入学時の英語運用能力を維持する者が最も多い」⁷といった特徴と大きく異なる。

さらに、「概して入学時に初級レベルだった者ほどレベルが高まる一方で、高いレベルに到達していた者ほど入学後の能力低下が目立った」(同志社大学高等教育・学生教育センター(編)2010:60)という点に関して、関西国際大学の2009年4月と7月のG-TELP受験データと比較すると次のようになる。2009年4月と7月それぞれについて、全体の平均点(2009年4月は122.5点、2009年7月は132.2点、表4参照)で受験者を得点の上位グループと下位グループに二分し、各グループの平均点の変化と標準偏差を示したものが表6である。平均点以上の上位グループは、4月時の得点平均は152.2点、7月時の得点平均は173.3点と、21.2点の上昇がみられた。また、平均点以下の下位グループの4月時の得点平均は93.4点、7月時の得点平均は99.9点と、6.5点の上昇がみられた。このように、どちらのグループにおいても入学後に得点が伸びているが、上位グループの方が下位グループに比べ得点の伸びが大きい。

以上のように、関西国際大学の1年次生の2009年4月と7月のG-TELP受験データは、同志社大学他の1年次生の入学時と調査時のCEFR受験データに基づく「一年生調査2009」の報告が示す結果とは大きく異なる。すなわち、同志社大学他では入学後に英語運用能力が高まった者は全体の30%未満で入学時の英語運用能力を維持する者が最も多かったのに対し、関西国際大学では全体の50%近くの学生の英語運用能力が高まり、入学時の英語運用能力を維持する者が最も少なかった。また、同志社大学他では、入学時に初級レベルだった者ほどレベルが高まる一方で、高いレベルに到達していた者ほど入学後の能力低下が目立ったと報告されたが、関西国際大学では、得点上昇の幅は上位グループの方が大きく、下位グループの方が小さいということがわかった。関西国際大学のデータと同志社大学他のデータはG-TELPとCEFRという異なる英語の試験に基づいたものであるため、試験のレベルや内容、その実施規模が異なることから一概に比較できるものではないが、入学時の英語力に関わらず入学後に全体的にスコアの上昇がみられることが関西国際大学の特徴といえる。

4. 適応調査と英語プレースメントテスト

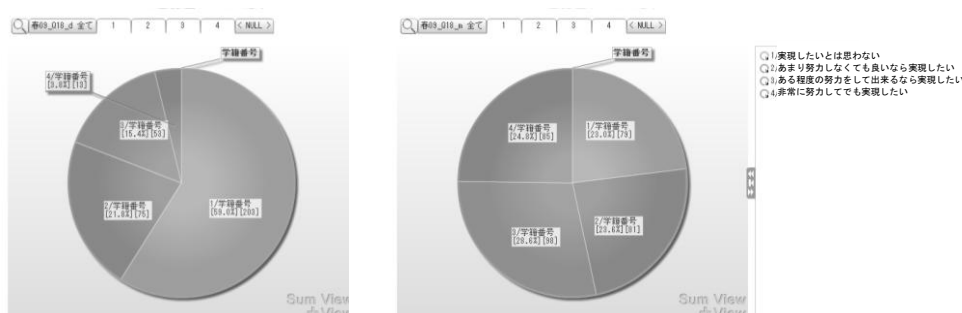
4.1 適応調査

次に、関西国際大学高等教育研究開発センターが実施している「適応調査」と英語プレースメントテストとして実施しているG-TELPの得点の関連について扱う。「適応調査」とは、大学がどのような学習支援や教育サービスを提供していくべきかを明らかにするための基礎資料とする目的で実施されるもので、大学への適応過程に関し調査する。主な設問内容は、学習習慣や学習動機などを中心に、学生が大学という新しい学習環境においてどのようなことに驚きかつ新しい発見をしたかということを探る。2009年第1回調査は2009年度入学生434名を対象に2009年5月に実施された。ここでは、適応調査の全26問の設問のうち、英語の学習と関連が深い項目として、学生が在学中に実現したいことを探る設問から「外国の大学に留学する」、「外国の旅行に行ってみる」の2項目を取りあげる。

当該の設問は、「あなたは在学中に下記のようなことを実現したいと思っていますか。それぞれの項目について、あてはまるものに○をつけてください。」というもので、資格や免許、成績、アルバイト、クラブ・サークル活動等に関するaからnまでの14の下位項目について学生の実現したい度合いを問うものである。学生は各項目について、「1. 実現したいとは思わない」から「4. 非常に努力してでも実現したい」のうち実現の度合いのあてはまるものを数字で1つ回答する。表7は、「d. 外国の大学に留学する」、「m. 外国の旅行に行ってみる」の2項目に関する各回答の回答者数を示したものである。各回答の回答者数の割合を図示すると図1のようになる。ここから、1から4の回答を、回答番号1の「実現したいとは思わない」という否定的な回答と、回答番号2から4の「あまり努力しなくても良いなら／ある程度の努力をして出来るなら／非常に努力してでも実現したい」という肯定的な回答に二分し各グループの回答者数の割合をみると、「d. 外国の大学に留学する」の項目については、実現したくないグループが217名(54.1%)、実現したいグループが184名(45.9%)（未回答者33名を除く）となり、実現したくないと回答した学生数が実現したいと回答した学生数を上回っていることがわかる。一方で、「m. 外国旅行に行ってみる」の項目については、実現したくないと回答したのは85名(21.3%)で、315名(78.8%)という8割近くに及ぶ学生が実現したいと回答している（未回答者33名を除く）（表7）。このことから、多くの学生が入学時に外国留学や外国旅行に対して関心を持っていることがわかる。

表 7. 2009 年第 1 回適応調査 (2009.5)

設 問				
Q.18	「あなたは在学中に下記のようなことを実現したいと思っていますか。それぞれの項目について、あてはまるものに○をつけてください。」			
	項 目	回 答	人 数	割 合
	d. 外国の大学に留学する	1. 実現したいとは思わない	217	217 (54.1%)
		2. あまり努力しなくても良いなら実現したい	83	184 (45.9%)
		3. ある程度の努力をして出来るなら実現したい	71	
		4. 非常に努力してでも実現したい	30	
	m. 外国旅行に行ってみる	1. 実現したいとは思わない	85	85 (21.3%)
		2. あまり努力しなくても良いなら実現したい	85	315 (78.8%)
		3. ある程度の努力をして出来るなら実現したい	118	
		4. 非常に努力してでも実現したい	112	



< 適応調査 Q.18 d. (留学) > < 適応調査 Q.18 m. (外国旅行) >
図 1. 適応調査回答者数 (2009.5)

4.2 適応調査と英語プレースメントテストの相関

ここで、「2009 年度第 1 回適応調査」(2009.5) の回答と先述の G-TELP (2009.4 および 2009.7) のスコアの関連について扱う。G-TELP 未受験者 (2009 年 4 月に 71 名, 2009 年 7 月に 85 名) を除くスコアと回答者数の分布及び平均を示すと表 8 および表 9 のようになる。すなわち、「d. 外国の大学に留学する」、「m. 外国の旅行に行ってみる」のいずれの項目についても、回答番号 1 の「実現したいとは思わない」という否定的な回答をした学生よりも、回答番号 2 から 4 の「実現したい」という肯定的な回答をした学生の方が G-TELP の得点が平均して高い。また、2009 年 4 月と 7 月の G-TELP の平均点の推移をみてみると、適応調査のいずれの回答者も 4 月受験時よりも 7 月受験時の方が得点が平均して上がっている (図 2)。ただし、G-TELP の得点ごとに見た適応調査の回答者数から明らかのように、高得点を取得している学生が必ずしも回答番号 2 から 4 の肯定的な回答をしているというわけではない (図 3)。

また、回答番号 1 の「実現したいとは思わない」否定的回答グループと、回答番号 2 から 4 の「実現したい」肯定的回答グループに二分して G-TELP 受験の 2 時点を比較すると、適応調査の留学に対する意識を問う項目 (Q.18 d.) については、実現したくないグループの G-TELP 平均が 122.3 点から 133.4 点と 11.1 点上昇しているのに対し、実現したいグループは 135.4 点から 152.9 点と 17.5 点上昇しており、実現したいグループの方が得点の上昇の幅が大きいことがわかる。一方で、外国旅行に対する意識を問う項目 (Q.18 m.) については、実現したくないグループが 121.1 点から 136.7 点と 15.6 点上昇しているのに対し、実現したいグループは 129.7 点から 143.0 点と 13.3 点上昇しており、両グループの間に顕著な傾向はみてとれなかった (表 10)。

表 8. 適応調査と G-TELP (2009.4)

G-TELP 2009.4

Q.18 d. 外国の大学に留学する

2009.5 Q18_d	1	2	3	4	< NULL >	総合計
TTL4						
< NULL >	14	8	18	17	14	71
255		1				1
220	1		1			2
215		2				2
210	1	1				2
205	2					2
200	1	2		1		4
195	4	2	3			9
190	2	1		1		4
185	5		1			6
180	4		2			6
175	5	2	1			8
170	4	2	1		1	8
165	6	2	2			10
160	4	5	5			14
155	4	3	2	2		11
150	3	5	2		2	12
145	7	3	2	3		15
140	9	2	1		2	14
135	9	5	3	1		18
130	8	8	5	1		22
125	12		3	1	2	18
120	13	1	2			16
115	10	2	4			16
110	9	3	1		3	16
105	5	1	3		3	12
100	14	8	2	1		25
95	14	5	2	1	2	24
90	10	1	1			12
85	13	3		1	2	19
80	8	3	1			12
75	5		1		1	7
70	4		1			5
65	6		1			7
60	1	1				2
55					1	1
50		1				1
人数	217	83	71	30	33	434
平均	122.3	134.6	135.7	138.8		
人数	217	184				
平均	122.3	135.4				

G-TELP 2009.4

Q.18 m. 外国旅行に行ってみる

- 1. 実現したいとは思わない
- 2. あまり努力しなくても良いなら実現したい
- 3. ある程度の努力をして出来るなら実現したい
- 4. 非常に努力しても実現したい

2009.5 Q18_m	1	2	3	4	< NULL >	総合計
TTL4						
< NULL >	6	4	20	27	14	71
255			1			1
220	1			1		2
215	1		1			2
210	1	1				2
205	1	1				2
200			2	2		4
195		3	4	2		9
190	2		2			4
185	3	1	1	1		6
180		2	3	1		6
175	4		1	3		8
170	1	4	2	1		8
165		3	4	3		10
160	1	1	6	6		14
155		3	5	3		11
150		2	4	4	2	12
145	3	3	5	3	1	15
140	2	4	1	4	3	14
135	5	6	4	3		18
130	7	3	6	6		22
125	2	3	4	7	2	18
120	6	4	3	3		16
115		7	6	3		16
110	5	3	3	2	3	16
105	2	3	2	2	3	12
100	1	9	8	7		25
95	8	4	3	7	2	24
90	4	3	1	4		12
85	7	5	2	3	2	19
80	6	1	5			12
75	2		4		1	7
70	3		1	1		5
65	1	1	3	2		7
60		1		1		2
55					1	1
50			1			1
人数	85	85	118	112	34	434
平均	121.1	127.5	131.6	129.6		
人数	85	315				
平均	121.1	129.7				

表 9. 適応調査と G-TELP (2009.7)

G-TELP 2009.7

Q.18 d. 外国の大学に留学する

2009.5 Q18_d	1	2	3	4	< NULL >	総合計
TTL7						
< NULL >	19	8	22	17	19	85
275	1					1
270		1				1
245	1	1				2
240				1		1
235		1				1
225	3	2				5
220		1				1
215	1	1	2			4
210	2	1	1			4
205	3	5	1			9
200	5	3	1			9
195	2		3			5
190	5	5		2		12
185	8	1	4	1	1	15
180	4	4	2			10
175	5	3	3		1	12
170	6	2	1			9
165	7	2	3	1		13
160	7		3			10
155	4	3	4			11
150	1	2	1	1		5
145	7	2		1		10
140	9	3	5	1		18
135	8	7	2	1	1	19
130	8	3	2		2	15
125	12	2	2		2	18
120	9	1	1	1	1	13
115	11	1	2		1	15
110	11	3	1			15
105	8	3	1	1		13
100	8		1			9
95	8	5	1		1	15
90	6				1	7
85	8	3	1			12
80	8	1			1	10
75	2	1	1	1	2	7
70	6					6
65	2	1		1		4
60		1				1
55	1					1
30	1					1
人数	217	83	71	30	33	434
平均	133.4	152.9	154.5	146.5		
人数	217	184				
平均	133.4	152.9				

G-TELP 2009.7

Q.18 m. 外国旅行に行ってみる

1. 実現したいとは思わない
2. あまり努力しなくても良いなら実現したい
3. ある程度の努力をして出来るなら実現したい
4. 非常に努力してでも実現したい

2009.5 Q18_m	1	2	3	4	< NULL >	総合計
TTL7						
< NULL >	4	7	27	28	19	85
275	1					1
270			1			1
245	1	1				2
240				1		1
235	1					1
225	1	1	2	1		5
220		1				1
215	1		2	1		4
210	1	1	2			4
205	4	1	2	2		9
200	1	3	2	3		9
195		2	1	2		5
190	2		5	5		12
185	1	5	5	4		15
180	2	3	3	2		10
175	1	2	3	4	2	12
170	4	3	1	1		9
165		7	4	2		13
160	2	2	5	1		10
155	1	2	3	5		11
150	1		3	1		5
145	3	2	2	3		10
140	6	2	2	8		18
135	2	10	3	3	1	19
130	4	2	2	5	2	15
125	6	1	5	4	2	18
120	6	4	2		1	13
115	4	4	5	1	1	15
110	3	1	7	3	1	15
105	4	2	3	4		13
100	1	1	2	5		9
95	4	3	4	3	1	15
90	2	1		3	1	7
85	5	5	2			12
80	1	2	4	2	1	10
75	1		3	1	2	7
70	2	2	1	1		6
65	1			3		4
60		1				1
55	1					1
30		1				1
人数	85	85	118	112	34	434
平均	136.7	141.8	144.9	142.2		
人数	85	315				
平均	136.7	143.0				

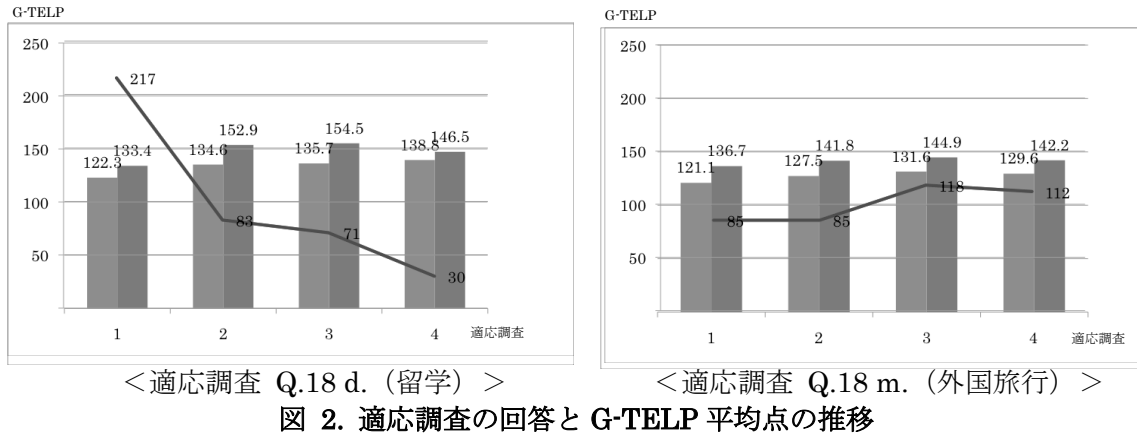


図 2. 適応調査の回答と G-TELP 平均点の推移

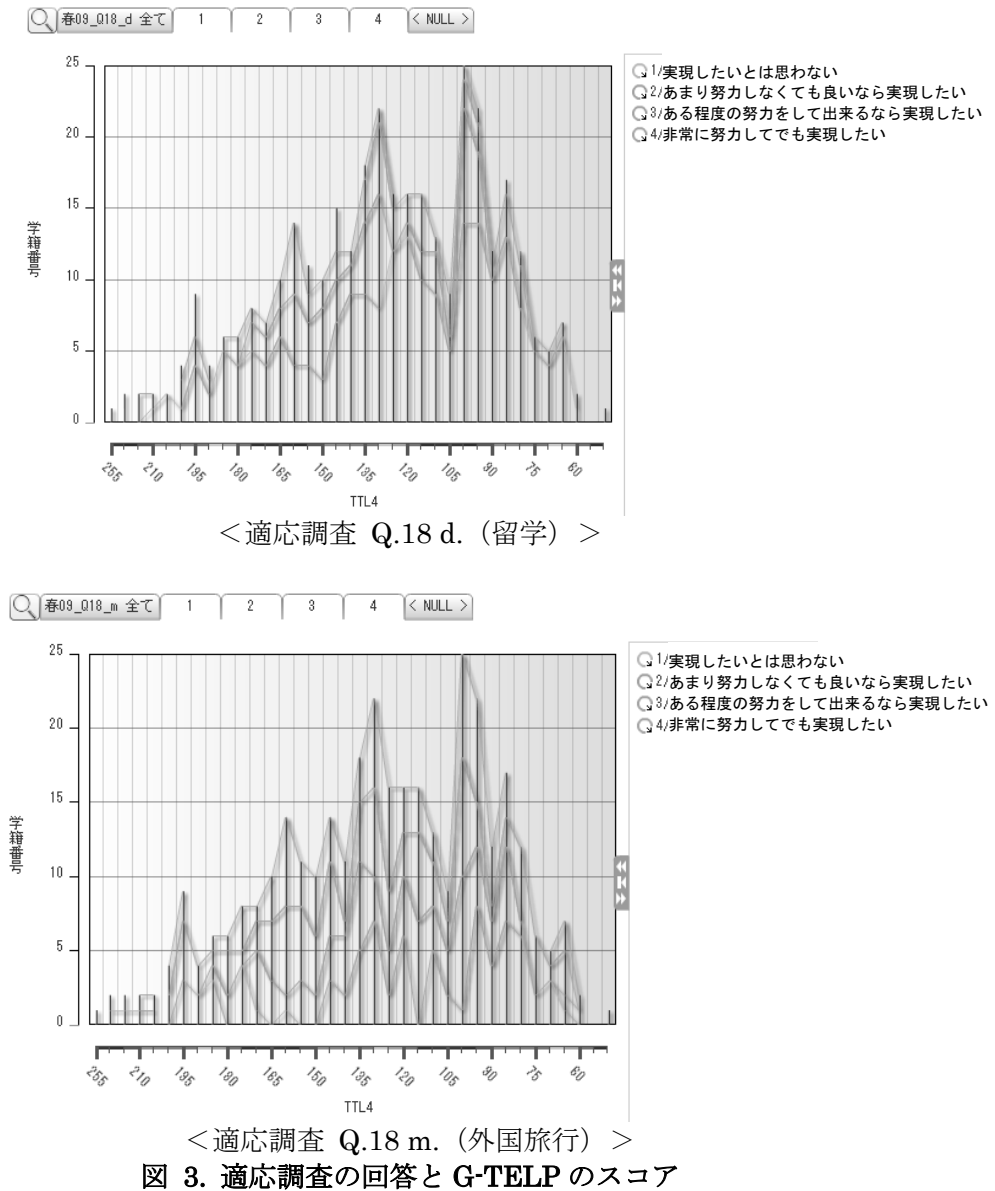


図 3. 適応調査の回答と G-TELP のスコア

表 10. 適応調査回答別にみる G-TELP スコアの変化

			G-TELP 平均		差
			2009. 4	2009. 7	
適 応 調 査	Q. 18 d. (留学)	実現したくない	122. 3	133. 4	11. 1
		実現したい	135. 4	152. 9	17. 5
	Q. 18 m. (外国旅行)	実現したくない	121. 1	136. 7	15. 6
		実現したい	129. 7	143. 0	13. 3

5. まとめ

本稿では、高等教育における英語教育の重点化との関連から、関西国際大学において英語プレースメントテストとして実施されている G-TELP を例に、同大学で 1 年次生を対象に実施されている適応調査との関連をみた。ここから、適応調査における「留学」、「外国旅行」のいずれの項目においても、「実現したくない」と回答したグループより「実現したい」と回答したグループの方が G-TELP が平均して高得点であることがわかった。春受験時と夏受験時の G-TELP のスコアの変化については、春受験時より夏受験時の方が平均スコアが高いことから、入学後に学生の英語能力の向上がみられるといえる。また、特に「留学」の項目について、「実現したくない」と回答したグループより「実現したい」と回答したグループの方が春受験時と夏受験時で G-TELP のスコアの伸びが大きいということがわかった。以上から、学生の入学時の留学に対する実現意識の高さと入学後の英語力の上達に関連があることが明らかとなった。関西国際大学においては、同一学生による複数回の G-TELP 受験データの蓄積が過去数年分にわたりあることから、今後は G-TELP をプレースメントテストとして利用する以外にも、1 年次生の英語能力の向上をはかる指標とするなど、IR (Institutional Research, 機関研究) の観点からの応用が期待できる。

注

- ¹ <http://www.e-jes.org/03033102.pdf>.
- ² 2006 年 11 月開設。近畿大学英語村 E3[e-cube]については、北爪佐知子(編著)(2010)に詳しい。
- ³ <http://www.tuat.ac.jp/~epc/pub/toeic100408.pdf>.
- ⁴ 国際教育交換協議会(CIEE)日本代表部 TOEFL 事業部(編)(2008), p. 30.
- ⁵ ETS 開発。英文エッセイをインターネット上で自動的に採点・分析し、管理まで可能にする教員向けライティング指導ツール。現在、名古屋大学、大阪女学院大学・短期大学、独協大学などが採用している。
- ⁶ 同志社大学高等教育・学生教育センター(編)(2010), p.60.
- ⁷ 前掲書, p.60.

参考文献

- 北村佐知子(編著)(2010)『近畿大学英語村：村長の告白』開文社出版。
- 国際教育交換協議会(CIEE)日本代表部 TOEFL 事業部(編)(2008)『TOEFL® テストスコア利用実態調査報告書』<http://www.cieej.or.jp/toefl/toefl/score_report2008.pdf>.
- 国際教育交換協議会(CIEE)日本代表部 TOEFL 事業部(編)(2005)『TOEFL®教育者セミナー 2005 夏 報告書：特色ある英語プログラムにおける TOEFL®-ITP 活用法~評価基準共有の観点から新たな高大連携の可能性を探る~』<http://www.cieej.or.jp/toefl/toefl/seminar_report2005.pdf>.
- 東京農工大学 大学教育センター 教育プログラム部門(2010)「東京農工大学 TOEIC 試行結果報告書」<<http://www.tuat.ac.jp/~epc/pub/toeic100408.pdf>>.
- 同志社大学高等教育・学生研究センター(編)(2010)『「一年性調査 2009」調査報告書』平成 21 年度文部科学省大学教育充実のための戦略的の大学連携支援プログラム「相互評価に基づく学士課程教育質保証システムの創出一国公立 4 大学 IR ネットワーク」. 2010.3.
- 山口大学(2004)「TOEIC を活用した英語カリキュラム：教育水準保証と学習支援」(平成 16 年度採択・文部科学省「特色ある大学教育支援プログラム(特色 GP)」)<<http://www.epc.yamaguchi-u.ac.jp/tokushoku2004report200803.pdf>>.

Abstract

This paper analyzes the results of *General Tests of English Language Proficiency*, or G-TELP, and *Freshman Survey 2009* which were conducted at Kansai University of International Studies in 2009. *Freshman Survey 2009* asks students if they want to realize something at the university or not, and questions about “to study abroad” and “to trip abroad” especially show strong correlation with G-TELP. For example, students who answered “want to study abroad” tend to achieve higher score in G-TELP and also there is a bigger difference between first and second tests, compared to those who answered “NOT want to study abroad.” In other words, students who have strong motivation to study abroad when they enter the university show remarkable progress in English competency after they enter the university.